

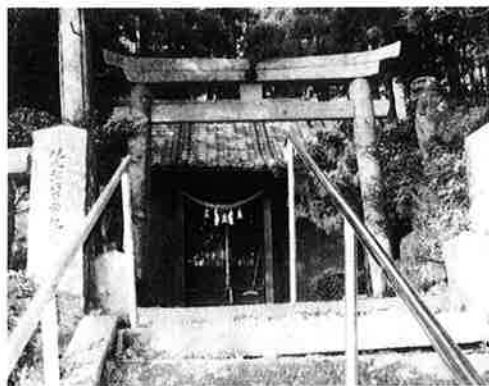
## 石間浦「彦神社」と

## 宮の内「彦神社」

## 彦嶽神社との関わり

高盛西郷

(会員 佐伯市大人島)



石間 彦神社

佐伯湾の最中に浮かぶ神話の島、大人島の南端、当浦の東北の遠見山（標高一九三・五メートル）登山道の麓にこんもりと杉に囲まれた鎮守の森がある。ここに私たちの氏神様「彦神社」（通称彦宮三柱神社）が鎮座している。

祭神は「国生み」の伊諾岐命、伊册美命と須佐之男神の三神で代々奉祀してきた。鎮座地は幾度か変り現在地になった。天保十三年壬寅年（一八四二）神明造りの鳥居と明治四十一年（一九〇八）棟上の社殿が現存している。

昭和十五年三月、皇紀二千六百年記念事業の一環として氏子中が神社周辺を整えたと古老は語り伝えている。

私が三柱を知ったのは三十年ほど前のことで、その由緒が気になっていた。氏子ら誰ひとり知る人はいない。幸いにも昨年六月のお祭りに神殿の中に収められていた棟札六枚余を拝見することができた。

その中に、表面『彦神社六百六十参歳奉祝祭當浦繁栄之攸』裏面に大正貳年、氏子総代ほか五名と神職加藤福太郎氏の名前が記されていた。一世紀ぶりに先人達の「証」を見ることができた。

早速、古江にお住まいの会員、宮下さん宅をお訪ねし

た。宮ノ内の「彦神社」（彦宮三所神社）の棟札写し「彦宮棟冊之銘」を拝見させてもらった。由来は福岡県豊前の英彦山の神が影向ようこうしてより彦岳と呼び眼下の小島（彦島）にも飛び移つて来たので彦島と呼んだと書かれていた。また、海で生活する漁人たちの舟を度々転覆させ困らせていた。神明の感靈厳しくて凡庸近づき難く、漁師たちは群議して浦の高い所に遷し、彦宮三所大権現と崇め尊んだとの内容が記されていた。

この度、拝見した六百六十参歳の棟札の歳月を遡ると七五六年前、建長三年（一二五一）で宮内の彦宮三所権現が修造された年に当たり驚喜した。偶然とは言い難い深い関わりが秘められているように思った。

又、宝暦三酉年の「佐伯古社神明帳」旧佐伯藩蔵に建長三亥歳より宝暦三酉歳まで五百三年石間浦とあり、当浦の「彦大権現」の創立時期でないかと思う。

当浦にはこんな伝承があります。天正二年（一五七四）四月、大友宗麟が鹿狩りに来たとき、宮ノ内の仮小屋に大宮八幡社の神主を召して牧の由来を尋ねられた。《馬産地でもない佐伯地方に馬牧の伝承がある。昔（鎌倉時代）那須氏の先祖が、平家追討のため下野国から豊後の国に

下向したとき「般若月毛」という名馬を連れてきた。そのおり、この名馬の種を残すため、前島（大入島）に放牧したが、それ以後ここに那須氏の牧、あるいは前島の牧といい、島の南にあたる「正世の尾」というところで毎年牧祭を行い大般若経を誦誦した。

牧役人は那須氏で年々馬三匹（頭）を調教し、一匹を彦之宮の新馬、一匹を佐伯家に上納、一匹を牧役の乗用としたという。この前島の馬牧は佐伯氏が軍馬を補給するため置いた放牧場のようで、毛利藩政になると自然消滅した。この伝承は大友興廃記にあるもので牧役人は、下野の那須氏ではなく、大神一族の那須氏であろう。》

〔佐伯氏一族の興亡〕・〔佐伯市史〕参照

時経て「正世の尾」は「障子ヶ尾」と変わり、神社の背後の尾根を登ると標高約一八〇の峰がある。通称三本松と云つて昭和二十五年頃まで松が聳えていた。神体山となつた頂上から、今でも誦誦が聞こえてくるようだ。

民話から察すると鎌倉中期、梅牟礼城を支配していた大神一族が平家追討の為、配下の奈須氏に軍馬の補給を命じ当浦に建長三年に渡つて来た。その時、国生み二神と天之押骨尊（天忍穂耳尊）の三神を峰に祭祀したのが

当浦の彦権現の始まりでないかとつくづく思う。

宮ノ内の『彦神社』は建久三年（一一九二）の創祀とも伝えられている。山伏の修験道場として名高い豊前の英彦山神宮にあやかって伊弉諾尊、伊弉册尊、天忍穗耳尊の三神を祭祀したという。寛政六年（一七九四）ごろの佐伯御領分中寺社記によれば当浦の彦権現を含めた島の神社十二カ所に宮野内の権現・秋葉様を加え、当島の柴田采女が祭司を勤めている。また、由来は不詳だが祭神までが同じであることも分かり、何故か一体感のある深い関わりを知ることが出来ました。

然しながら明治四年の太政官布告によって村社に列せられ、昭和二十一年の宗教法人による届出の際、当浦の祭神の一神が「素戔鳴尊」に改変されている。他所にもその傾向が見受けられる。明治初年の神仏分離後の「神社明細帳」によれば、小祠は合祀され鎮座する神々も多々代えられており、その矛盾さに驚かされました。

連山の霊峰「尺間神社」は天正元年（一五七三）七月が紀元とされているが、英彦山の影響を受けた「彦社」も鎌倉時代には修験者の立入る霊山であり、明治十一年「社」ができるまでは山の神として「石祠」を立て自然を

崇めたのではなからうか。昨年十月、明治に造られた彦嶽神社本殿の改築作業の際、出てきた御神体の裏に刻まれた年月は寛文元年（一六六一）で神社名は彦嶽山十二神社と明記されているが明治七年二月の届出は「彦神社」とあり祭神も全く異なり、どうしたものかと思えます。

諸説はいろいろあると思いますが①英彦山から彦嶽山に影向し更に彦島に飛び移り人々が住む②宮ノ内に遷宮されて③石間浦・④彦嶽山へと先人は鎮座させて行ったのではないだろうか。棟札を通じ私たちの小さな氏神様にも古い歴史が刻まれていることを知ることができました。



石間 彦神社棟札

神社の祭神

①英彦山神宮

(通称英彦山神宮)

奉鎮座 伊弉諾尊

伊弉册尊

天忍穗耳尊

③石間の彦神社

(通称彦宮三柱神社)

奉鎮座 伊弉諾尊

伊弉册尊

素戔嗚尊

②宮ノ内彦神社

(通称彦宮三所神社)

奉鎮座 伊弉諾尊

伊弉册尊

天忍穗耳尊

④彦嶽の彦神社

(通称彦嶽山十二神社)

奉鎮座 伊弉諾尊 守護

伊弉册尊

彦火々出見尊

石間「彦神社」棟札(一九一一年前)

文化十三丙子六月廿日 藤原盛著柴田播磨正

奉再建彦宮三柱大権現御殿一字氏子繁栄攸

當城主從五位下毛利豊前守藤原朝臣高翰護御武運長久

裏 石間浦庄屋

清家 儀兵衛

地目付 惣吉

宮ノ内「彦神社」棟札(一七六年前)

天下泰平

當御城主 毛利出雲守藤原朝臣高翰公御武運長久  
奉上棟彦三所大権現社頭一字處

庄屋 喜右衛門

天保二卯年九月 神主 柴田肥前正藤原盛住

地目付 要吉

大工 戸穴村 岩佐周藏

同 順吉

同 万吉

木挽 宮本 奈須磨藏

宮本 奈須磨藏

柱大板厚造栄之

當浦惣産子中安全有漁満足所

叶 石間浦

惣氏子中

頭百姓 傅吉

戸穴村大工 金藏

戸穴村棟梁 弥兵衛 同 須藏

木挽 戸穴村 六兵衛